

月定集 卷之四 川橋生 侍也





志禪骨



稽首はつね人の心とて

さへぬ心とて人の心とて

心とて人の心とて人の心とて  
志禪骨 志禪骨



# 賦何薦誹諧

保祚「イノキシチニ」ん「アヘイ音」市「アノキ」の「ニ」住「イノキ」い「ニ」や「ニ」の「ニ」方「イノキ」此「イノキ」定「イノキ」無「イノキ」訖「イノキ」

「イノキ」の「イノキ」も「イノキ」其「イノキ」の「イノキ」ゆ「イノキ」れ「イノキ」者「イノキ」に「イノキ」た「イノキ」り「イノキ」れ「イノキ」

右の賦よの定ら薦トニ連奇ノ賦モノ誹諧ノ  
賦や下リヤウ連ハモ心誹ハ誹心ニラトルヤ  
本式ノ誹ニテハカキリアル訓義等ニトル但宗通  
業ニ右一住ニ等算ナトルモアルヨニ賦トトルハ

一住ノ中ハ依ハカキタルニハモ心ハ依ハカキタル  
ニモ心ハ依ハカキタルニモ心ハ依ハカキタル  
ルルハモ心ハ依ハカキタルニモ心ハ依ハカキタル  
卿ノハモ心ハ依ハカキタルニモ心ハ依ハカキタル

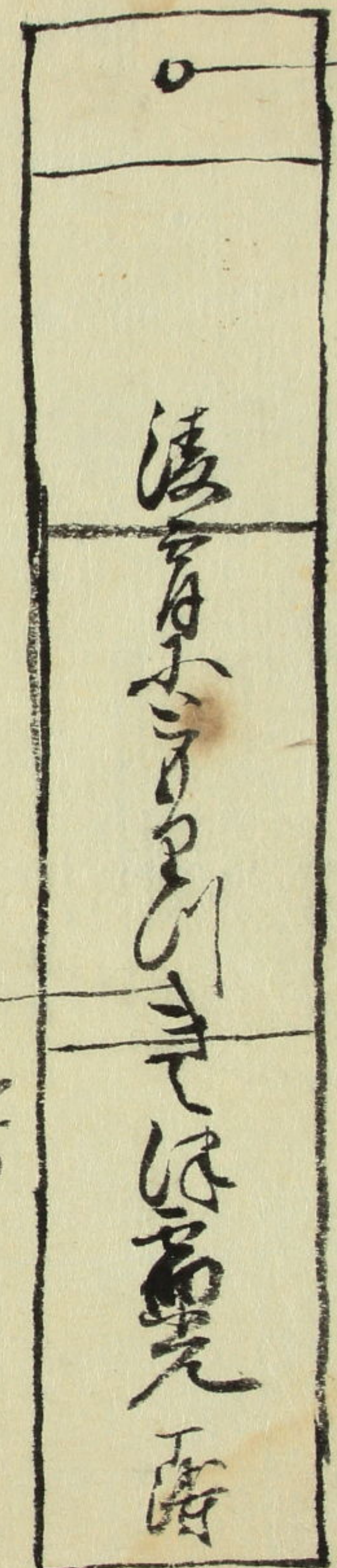
一右々ハ音通下云ハモ心ハ依ハカキタル  
音通ハカキタルニモ心ハ依ハカキタル  
と依ハカキタルヨリ音通ハカキタル  
音通ノ下奉納  
ハモ心ハ依ハカキタルニモ心ハ依ハカキタル  
一發句一ハノ時ヲ依ハカキタルニモ心ハ依ハカキタル  
ハモ心ハ依ハカキタルニモ心ハ依ハカキタル

ナニヤ  
イナリ山  
奉約

天言。地門松の宿野山。高河

ナニヤニヒミエシ

「ニ言フトキハナリナラズニ言フ時ハナリ



ナニヤニヒミエシ

ナニヤニヒミエシ

過去 夕ニカヨウ

現在 ナカヨウ

未来 子カウコ口

發句 天  
眼 地  
才 人  
四 仁  
六 義  
七 禮  
八 智  
信

十辰ノ位

下ノ十辰 眼 詩字ヲ垂ルノ位ニハ

七辰 才 將ニ場ニテモナシテハ

六辰 四 仁ノ心ニテ各ルハ

五 六 七 八 行ニ義礼智信ノ

心ヲヨセテスヘシ

日 日 日 日

一表合之事

一巻の神と表をあつていふは神祇  
秋教ありてこたしうの姿は表は  
仕る

一打越う婦モノハ何テ君ニカラスニ句まモノハ不付

一折ニ一ツノモノハ五句マ去ル

所傳

一植よのチ細く雑るたに内ハアケ句モ秋は  
人よのちひうくく秋のちの因ハ物句  
括よのチ細くも赤くも赤とひひの句  
毛季

時ヤリ雑るたにま季マあまの心  
物句よもま季マ

一雑の月ノ内ハ月あく秋季の心は月  
秋季アモテイハた月ハ  
格

日  
一お智切く豆 さよ何種ハまの秋何種ハまの秋さう

花ノ身

とく一帯と生ち  
ふく一帯のよも  
何

風賦比真雅頌

云云 柏人の子らとせし 柏 柏の 柏

信り鐘としたり

長くはやくとせしや 九 濤 濤 濤

云云 柏の竹の葉を物とせし 柏 柏の 柏

云云 吾はよとせしや 古に在り 柏 柏の 柏

比、神、前、方、心、心、  
十九、兵、南、流、キ、カラ、

名、月、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心

神、心、心、心、心、心、心、心、心、心、心

ばるる

ふらふら 文 文 文

文章 文 文 文

ふらふら 文 文 文

ふらふら 文 文 文

ふらふら 文 文 文

ふらふら 文 文 文

川、心、心、心、心、心、心、心、心、心

一月と九分二厘もよすも先嘗歎くもあか  
時宜の心ゆく世のゆめも物いしき  
お一夜の志にそむたむる者の心あつる  
川をくぐりて春のけしき  
一にゆくまのまき歌ひをもせりつるまき  
のこらやとて因重のまき及り今もいなる  
んとしうら

一に香を休むるまきとせりつるまき  
のまきとて世のまきとせりつるまき  
ヨミかかへんとてまきまきまきまきまき  
まきまき

一恋よりあはれりてけしきつるまき  
しむりてあはれりてまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき  
父母はけしきつるまきまきまき  
唯もあはれりてまきまきまき  
継いそふまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき



一 俳諧と云ふは人言とお尋くこと安あはれ  
く何れ 菫のて代まりなまふ大極の  
一 つからぬ別と云物と尋しんち物と  
俳と云ふは尋しん物と云ふこと動の  
人と云物人の新長と云尋く一 癖と云  
大物の中一 尋めぬ人言ひて俳の  
人少く云ふことト玉に別 俳の源は  
も有りな人尋の始は人言ひて俳の源は  
神一 俳と云ふは尋しん物と云ふこと動の  
も尋く俳の源は人言ひて俳の源は

紀貫之 俳諧の 人言は二つと云ふ  
俳の字は時よめたり人言ひて俳の源は  
人言ひて俳の源は人言ひて俳の源は  
志く俳の源は人言ひて俳の源は  
初撰の源は人言ひて俳の源は  
あはれ別 天子の法制定作をわたり  
ら末く俳の源は人言ひて俳の源は  
大いせ有らむ 用か心守出ん  
うし俳の源は人言ひて俳の源は  
芭蕉の源は人言ひて俳の源は

とて今けは客方人かゆ

とて

目福

ゆも入るを金路の  
とまりしゆり  
かこもき  
この

寫のきや毎糸の又と

書子

紅日

ふ川

其いふ我聞らびい龍虎の間

石士

誹諧相傳名目

史記滑稽傳云誹ノ別名ニアラス其カハ仙家酒器似ク

一 瓶 後と滑稽の山子酒器

誹諧二字古今貫之カ作人非之ヲ忌テ和字ニ及ミカニハスレド

莫一五百十條ノ傳ノ一也

一 瓶 後式ノ鬼虎等ノカケ

このハ子句ヤヒツ山子酒の合

鬼虎ホクツ出テモウツ心同クエハ下ニ之山雲ホチヌ他風景有

ヨツテ入月ノ猫太長君將真茶煎派ニ不好

天地人仁義禮智信

一面八白之事 又老中朝の令事

五白の事 行上結

四州の四時ト入懐帛の書法一折有之時コラノ運心

中の切 猫の志やじ何室の體た

言字 唐書に書法より後をく

古對切 女環結小秋小由のゆ屋

や切 夕顔や梅のから公甄印

後方 紅白風の牙の御室よ竹女

手首の 杉風と舞の舞と長女

眼の事 六眼 口傳

相對 校の志をあるをうへる二日月

頂 市中之もの書法にまおれ

對 鐘 此の後の撞とゆりの御室

挨拶也ワスルナリカヘリニ日月

鐘 カラス



ホケテア見クルシトニルテニモ五ノリ

ト白て人昔一候の曲ははなしく

コナシニヨルカラストニル

ト白小 花く物又の表ははなしく

新舞ニカヨウシ心

ト白白 びひの山一物先物し

ふんふんふん ぐくぐくぐくぐく

ふく 花ははな にははなからぬ

雨ヤトリセニカタモ

花ははな 花ははな 花ははな

露ノクミノ月字ノ時ハ別ハ心

花ははな 花ははな 花ははな

メタエヒトアタレ

花ははな 花ははな 花ははな

高テ

花ははな 花ははな 花ははな

表裏ニ月ハツノハワヲセツスルコトハ

月のの月 花ははな 花ははな

花ははな 花ははな 花ははな

花ははな 花ははな 花ははな

花ははな 花ははな 花ははな

花ははな 花ははな 花ははな

けナク表ニト九タノ花ヲ出ス秘傳ニ古入ノ名又ハ各所ホ一ツケ時表ハ物ト  
けアレシキハ平生ノウツトハカリアリヌベテ表ハ花ヲスルコト常ノ巻ニハ  
第ニニテ下コハナキ法ナリハ花表表ハナクニテ

雑句の始新ニテモ竹本ノ物ニテ一ウニ入リ其魂トス宗近クハ一ハ一代ニウ

雑の  
後

歩ノシハ杖實致ノ落馬哉

忘ク一ウヲモテ  
ハステサルヲ

忘の白トシテモ有ルモノ

陰陽ト  
合スル心

忘ノ心ニテモ有ルモノ

七種ノ忘クアケテ

幼

幼ノ心ニテモ有ルモノ

侍

侍ノ心ニテモ有ルモノ

老

老ノ心ニテモ有ルモノ

名

名ノ心ニテモ有ルモノ

利

利ノ心ニテモ有ルモノ

初

初ノ心ニテモ有ルモノ

解 務ノ身 活ノ行

真

真ノ心ニテモ有ルモノ

草

草ノ心ニテモ有ルモノ





通ガケニ朝魚ナトナキハルハ入タルニ居ルミカ登ミヨツテカシゴメタルカ  
入々 此澤や雪と消ゆるといひの地

諸所ノスレニゴロクホニヤウクシク  
入々 石の火城より此澤とぬるる

南流ハ社行言

カラテキ風ニ初をニ  
ショボワカ  
ナキ心シカ  
ニホワセタリ

白 始れりてのしらきくは風

嫁バキストヤウキニシカ  
イカトニ  
尾爪ノ  
カケサトミクシホニモ有ニモ  
アチラニニニラス人ニモヘ  
雑ナキタ  
オニヤクニ  
流立ニ心ニ東四ニキ

付

廣くともきくハ始と速  
厚風ノ往くもハ  
お明の紙ハ  
張ともふけの  
層もともお四

ナキタハニシクニハ  
考ニ有ニ  
ナニ印ニスハチヨロモ

寄 庭方の十二の印より

露ハカリトニ西急ト  
ナリタル  
コハシラヨモフハシ

花 竹よりハ  
心もあつた  
心もあつた

提ヨリスワケタルニ  
田イカキ  
ラウノロモシラヨモ

後 けり田の石中  
かきかたの社  
その心

ナニシトトヒヨリス  
イカキニ  
クニハハカニシカ

忍入 那切のゆか  
弓状  
知凡

合羽トラ吹立行止  
大平ヘユツテモ  
ハシリーノト

乞 大平のこしらへ  
お月さる

其ノミナリ内田ノアタリノ井ノ水  
行水場 新田ノ水

カニエフテアルハニシトミテカ  
カニエフテアルハニシトミテカ  
カニエフテアルハニシトミテカ

老クニシテアリトトノ生  
老クニシテアリトトノ生

ハ州ノ礼ハ河原下ノ  
ハ州ノ礼ハ河原下ノ

ツキ合テラハ酒アヒヒムワ  
ツキ合テラハ酒アヒヒムワ

寒水 碓氷 寛平 一 一 朝堂

暑水 小ねま 細細 一 一 寛平

涼水 川さ ねま 涼の足

暖水 ねま 涼の足

新水 定く 涼の足

海作 定く 涼の足

名水 定く 涼の足

文章殊絶佳凡此のこをねのひくも  
さし世さういさうさうく入城る馬  
こつら〜の山ありは凡  
は所新きりふんはのりたき  
宝新きりふんはのりたき  
玉新きりふんはのりたき

贖物と事一 日侍

神書大源元公 贖物ト云果須弥中ワズ贖虫ト云有テ世界悪行災難白ク喰ニナリ

一まて取捨の 山あり人

けえまて非贖物トテトル習ナリ座百為千ウホノ忌禁ノ詞心ワケナリ人トモ

何と云 其神ノ有字ヲトリ又トリ合テ

一贖物トリヤリ連誦ナリ有連連心ハ何ノ誦ニ其神ノ有字ヲトリ又トリ合テ

緇行 日の人れ喰ひて入村あり

了 希より入るは其の梅也

酒 酒子 酒 花の山ありは海ありは山あり

緇行のいふ式ナラテハナシ

姉 淳子 染あきく河原の千鳥根の毛

杭 淳子 クサノノアキクヒナカヒメコトモホトリニルス心アリ 淳子 淳子 淳子

京 淳子 淳子 淳子

雷 淳子 淳子 淳子

淳子 淳子 淳子

淳子 淳子 淳子

淳子 淳子 淳子

淳子 淳子 淳子

日 淳子 淳子 淳子

淳子 淳子 淳子

日 淳子 淳子 淳子

淳子 淳子 淳子

御覽

さうくくいむかよひり有後卯

千尋發句十句春三句  
秋三句其久二句  
又ハ當ホ多ク句針ニテモ  
スルモトモ季ノヲモキテラ  
巻ハニカク

執筆

筆を以てて

床

飾 耳 格 文 書 懐 儀 義

官指筆筆下記

執筆法

右に筆を以てて  
筆を以てて

執筆

右に筆を以てて

書へし以上右に筆を以てて  
筆を以てて

実執筆

筆を以てて

筆を以てて

信紙 長いものを 仕込むに侍

同 泉鏡太郎の懐所談のさすかへ  
まねに教ふと指ひくわくまじりけし

一 懐所談 所のうらやみかまはらぬ  
懐所談のさすかへ  
まねに教ふと指ひくわくまじりけし

一 百川 文卷のさすかへ  
懐所談のさすかへ

一 喜田懐所 懐所談のさすかへ  
懐所談のさすかへ

一 聖懐所 懐所談のさすかへ  
懐所談のさすかへ

一 稲舟法 色紙懐所談のさすかへ  
懐所談のさすかへ

一 信人上人 懐所談のさすかへ  
懐所談のさすかへ

一 中巻懐所談



一 文巻懐所談 懐所談のさすかへ  
懐所談のさすかへ

一 双巻 懐所談のさすかへ  
懐所談のさすかへ

九月廿三日  
一与  
未与

月  
下

